



大人の恋の収め方

ジャーナリスト
松本 侑壬子

主人公はバルト海沿岸の国エストニアからパリに働きに来た中年女性である。今年三四歳の監督の母親がモデルだという。彼女の視点から雇い主である女性の大人の恋の収め方を描いている。

故国の老人ホームで働いていたアンヌは、夫とは離婚、子どもも独立した。この二年間介護を続けてきた母親が亡くなり、心身ともに疲れ切つて抜け殻のようになつていた。そこへ一本の電話。エストニア出身でパリに住む老婦人が、世話を求めているが、という誘いだ。心機一転、旅立つた。

空港に出迎えてくれたほぼ同年代のステファンという男性に、高級住宅街のアパルトマンに案内される。女主人のフリーダは既に就寝中で、ステファンは何かあったら自分が経営しているカフェに連絡するように言い残して帰つて行つた。アンヌはこつそりとアパルトマンを出て、夜の街へ。長年の憧れのパリを自

分の足で歩くうれしさ。

だが、翌日、朝食を部屋に届けると、フリーダは不機嫌でフランス語しか話さず、朝食は手も付けぬ。その上、家政婦などいらない、とアンヌを追い出してしまふ。困つてカフェに行くと、ステファンに、朝食はクロワッサンと紅茶に決まつており、他の人に対しても同じだからあきらめないようにと諭される。

翌朝、今度は言われたとおりの朝食を持つて行くと、これはスーパード買った偽物のクロワッサンで、自分はパン屋で焼いた本物しか食べない、と投げ捨てる。泣きたい思いのアンヌを尻目に、フリーダが花の笑顔を見せたのは、ステファンが駆けつけた時。はは〜ん。果たして彼の説得で、フリーダは渋々ながらアンヌを受け入れる。

ステファンはアンヌに、実は若いころ二人は年の離れた恋人同士であつたと、遠い昔にパリに来たフリーダには、

今は親戚も友人もなく天涯孤独の身の上だと話す。一方、アンヌの入れる紅茶が気に入つたフリーダは、キッチンに来て、自らステファンがパリに来たばかりのころに出会い、それぞれ愛人がいたが、二人は互いの自宅とカフェを行き来してしばらく情事が続いた。自分が生涯で愛したのは夫とステファンだけ、と恋のいきさつを語る。

老人と少女の恋はゲーテの昔からあつたが、現在はシニア女性の年下の男性との恋愛が大流行。岸恵子の熟年恋愛小説も一七万部の大ベストセラー(六月現在)とか。実際にそういう恋は私の周辺にもあり、むしろかつこいい話とされる。だが、心配性の私は、ロマンチックで結ばれた女性の老い先が気になる。ちなみに夫なら長年の生活実態を知り尽くし、大概は半ばあきらめと必要に迫られて(?!)、互いに老人の実像を見せあつて生きていくのだが。

そこは、恋の国フランス。かつて愛した年下の男の心は自分から離れ、身代わりにアンヌを当てがわれたと察したフリーダは、初め激しく抵抗する。だが、そのアンヌの優しさが、彼女の不安を包み、恋愛万能主義から大人の恋の収め方へと導く。大女優ジャンヌ・モローの面目躍如!さすがである。



『クロワッサンで朝食を』

フランス・エストニア・ベルギー合作映画 (95分)

監督: イルマル・ラーゲ

出演: ジャンヌ・モロー、ライネ・マギ、パトリック・ピノー

公開中

© TS Productions - Amrion Oü - La Parti Production - 2012